

## 詩篇98篇

## 0 賛歌

《主の救いを見て歌え》

- 1 新しい歌を【主】に歌え。主は、奇しいわざをなさった。その右の御手と、その聖なる御腕とが、主に勝利をもたらしたのだ。
- 2 【主】は御救いを知らしめ、その義を国々の前に現された。
- 3 主はイスラエルの家への恵みと真実を覚えておられる。地の果て果てまでもが、みな、われらの神の救いを見ている。

《賛美への招き：諸国》

- 4 全地よ。【主】に喜び叫べ。大声で叫び、喜び歌い、ほめ歌を歌え。
- 5 立琴に合わせて、【主】にほめ歌を歌え。立琴と歌の調べに合わせて。
- 6 ラッパと角笛の音に合わせて、【主】である王の御前で喜び叫べ。

《賛美の招き：被造世界》

- 7 海と、それに満ちているもの。世界と、その中に住むものよ。鳴りとどろけ。
- 8 もろもろの川よ。手を打ち鳴らせ。山々も、こぞって【主】の御前で喜び歌え。
- 9 確かに、主は地をさばくために来られる。主は義をもって世界をさばき、公正をもって国々の民を、さばかれる。

英国国教会の祈祷書では、本篇を「夕べの祈り」の中に取り入れているそうです。タイトルが単純に「賛歌」(מְזוֹרָה／ミズモール)とだけ書かれている詩篇は他になく、最初から最後まで賛美で埋め尽くそうという詩人の思いが感じられます。本篇は構造的に96篇と共通点が多く、「新しい歌」で始まり「主の正しい審き」の待望でもって締めくくられるところなど、兄弟のような二篇と言えます。背景としては、おそらくバビロン捕囚から解放された民の喜びがあるでしょう。

1～3節では、過去に主がなされた救いの御業が思い起こされています。バビロン捕囚だけではありません。イスラエルの民をエジプトでの奴隷生活から解放し、海を分け、40年間荒野で養い、ヨルダン川を渡らせ、カナン之地を奪還させてくださった主の一つひとつの歴史的救済が含まれています。イスラエル民族のアイデンティティそのものが「贖われた民」である所以です。

改めて「新しい歌」について考えてみましょう<sup>1</sup>。詩人の念頭には、「新しい歌」というのは、主

<sup>1</sup> 96篇では次のように書かせていただきました。

「1節冒頭に出てくる「新しい歌」ということばから、何とも言えぬ新鮮さが伝わってくるでしょう。私たちが歌っている賛美は、新しく作られたものもあれば、伝統的なものを繰り返し味わうこともあ

が自分に対してなされた良き御業、救いの御業が思い出されるときにほとぼしり出てくるものだという考えがあるようです。そのように次々と新しいメロディが湧き出てくるといいのですが、作曲の天分がなかったとしても、自分の中に蓄えられている賛美が脳裏を巡り始めることはあるでしょう。喜びの時、怒りの時、悲しみの時にふさわしい賛美が口を突いて出てくるのです。

「右の御手」「聖なる御腕」とは、神の力強い守りを意味します。更に、主にのみ帰されるべきことばが次々と登場し（「勝利」「救い」「義」「真実」）、その正しい判断と審きと救いが表されています。

4～6節では、全世界の民への賛美の呼びかけがあります。ここで「全地」と言うとき、5～6節で「立琴」「ラツパ」「角笛」などの楽器を用いて賛美すべきことが前提とされているので、「人への呼びかけ」と捉えることができるでしょう。ここに挙げられている三つの楽器は、弦楽器、吹奏楽器の代表であり、現代にあっては限りなく完成形に近づいた諸々の楽器を用いて賛美することが推奨されているはずで

ここで印象的なのは「喜び叫べ」「大声で叫べ」「喜び歌い」などの表現です。私たちが賛美をささげるとき、それほどの思いが自分の内にあるかどうかを探ってみることは大切です。罪赦された喜びが大きければ大きいほど、その賛美の歌声は大きくなるでしょう。だからこそ、福音理解は賛美の発信源なのです。

7～9節は、96篇と同様、被造世界への賛美の招きとなっています。ここまで読んできて、「イスラエルが救われた喜び」→「全世界の民を巻き込む賛美」→「被造世界全体を巻き込む賛美」と、賛美の歌声が拡大してきていることが分かるでしょう。

「海」は、旧約聖書では特に混沌の勢力を表すものとしてよく登場します。荒れ狂う海は、人間の力の範疇をはるかに超えたものです。しかし、主イエスの一声によって嵐は鎮まり湖は大風となったように、被造物は神を畏れているのです。海だけではありません。「川」も「山々」も、主が造られたものです。

私たちの賛美が全世界の民と共に、全被造物と共に、主にささげられる日が来ようとしています。再臨の主が万物によって認められるとき、私たちは真に礼拝されるべき方が礼拝される情景を確かにこの目で見ることになるでしょう。今私たちがささげる一つひとつの賛美が、その日とのつながりを持っていることをいつも思いつつ、声を合わせたいと思います。

---

ります。いずれも尊い賛美なのであり、その用いられ方において尊重されるべきでしょう。ここで言われている「新しさ」とはむしろ、来る朝ごとにささげる賛美の新鮮さのことが言われていると思われます。聖書と祈りをもって一日を始めることはふさわしいことですが、そこに賛美が加えられると更に力が増し加わるでしょう。」